

**さざなみ** : **滋賀医科大学附属図書館報** No.47  
(2001.2)

|     |   |
|-----|---|
| 発行年 | 2001-02   |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10422/1157">http://hdl.handle.net/10422/1157</a> |

# さざなみ



三井寺から  
琵琶湖を遠望する  
(詳細は8頁)

(上) 明治22～3年頃に撮影された古写真  
(国際日本文化研究センター所蔵)

(右) 平成12年11月に撮影した写真  
(撮影：学生課 成宮護)



滋賀医科大学附属図書館報

No.47

## 目 次

2001年2月

|                                      |                      |   |
|--------------------------------------|----------------------|---|
| IT革命 .....                           | 予防医学講座 教授 西山 勝夫..... | 2 |
| シリーズ「本との出会い」(11)                     |                      |   |
| 予期せぬできごとが縁で .....                    | 看護部 副看護部長 三島 幸子..... | 3 |
| 図書館探訪 ～滋賀県立大学図書情報センター～ .....         |                      | 4 |
| お知らせ .....                           |                      | 5 |
| EBMR・外国雑誌・学生用図書・看護関係図書・医学史関連西洋古典文献集成 |                      |   |
| 附属図書館利用講習会(報告) .....                 |                      | 7 |
| 本学関係者寄贈図書 .....                      |                      | 8 |
| 表紙写真について .....                       |                      | 8 |

# IT革命



予防医学講座 教授 西山 勝夫

昨年はIT(Information Technology、情報通信技術)革命という言葉が席卷し、遂に年末には新語・流行語大賞に選ばれた。パソコンの普及率がワープロを上回り、液晶型の表示部の出荷台数がブラウン管型を追い抜き、インターネットの利用率が人口の1割以上を占める一方、携帯電話・パソコンの「通信費」による他の支出の圧迫や、多数の人々が急速な情報化社会に「不安」を抱いていること、情報格差等が問題になるに至った。

私事だが一昨年6月カナダ出張時には海外ローミングサービスのあるプロバイダーと契約の上出発し、Windows CEのモバイルコンピュータで電子メールにより校務などを処理しようとしたが、トラブルに遭遇した。そこで昨年11月の伊・蘭・独・仏への出張に際しては直前に発売されたCPUがCru-soeのA5サイズWindowsノートパソコンを買い、国際的に圧倒的シェアを有するプロバイダーに調整し出国した。帰国前夜に投宿したシャルルドゴール空港内某ホテルで電話用ジャックが見当たらないのには驚いたが、それ以外ではホテル(何れも星印無)でも日本国内と同じモジュラーケーブルを使え(コンピュータ用に別口のジャックが設備されているところもあった)、「ビジネスホンからインターネットできるLine Changerモバイル」なる物も無用であった。何度やり直しても「接続不可」が表示され苦慮した所があったが、それはチェックイン時のフロントデスクによる室内電話の外線接続切り換え忘れや日本で案内された電話番号が携帯電話専用等が原因であった。電話も通ぜず訪問数日前まで日程を具体化できなかった訪問相手との連絡調整や校務などの処理におおいに役だった。またイタリアではバスの延着で予約便に数分の差で乗り損ね、翌日の航空便でしかオランダへ行けなくなり、互いに見ず知らずの3人が3カ国からスキホール空港に集合する段取りがご破算になった際には、急遽投宿することになったホテルの電話から約束時間直前に一人が持っていた携帯電話を呼び出せたおかげで事なきを得た。かかる手段がなければどうなっていたかと冷や汗をかき、日進月歩のITの恩恵をいたって実感した出張であった。

私の専門との関わりでは、20世紀においては人々はともすれば新技術の利便性・効率のみに目を奪われがちで、惹起される健康障害への対応は事後的であったことがITでも当たっていたことや、問題がいまだ全て解明されたとはいえないことをあげなければならない。全国の企業に対して行われている5年ごとの労働省調査では、コンピュータ機器の導入目的は「業務の合理化・効率化」が最も多く9割、「社内情報の共有化」3割、「企画・調査分析業務の強化」が2割で、「労働条件の向上」は1割に及ばず、操作時間や小休止・休息・休憩などの作業管理、健康管理などの実施率もこの10年程ほとんど傾向は変わらず、コンピュータ機器の使用に伴い精神的な疲労やストレスを感じている労働者は4割、身体疲労・自覚症状のある労働者は8割に達している。労働省によれば最近のVDT検診実施事業場数は8万程度(実施率4%台)、受診労働者数は17万人に満たない(有所見率5%前後)。小型化・携帯化がすすみ、従来の事務室以外の空間・場所での利用が急増しているが、そこまで行き届いていない。このような状況では、これからの「IT革命」でも健康問題について予断は許されないといわれている。これらの点についても医学部や医科大学のかかわる学術情報・図書館・図書における「IT革命」では大いに先鞭がつけられなければならないと思う。

(にしやまかつお)

シリーズ「本との出会い」(1)

## 予期せぬできごとが縁で



看護部 副看護部長

### 三島 幸子

20世紀最後の夏は、残暑が厳しかった。そんな夏の終わりのある朝、予期せぬ出来事が起こったのである。我が人生のパートナーである犬が散歩の途中で突然足が萎えてしまい、入院する事になった。不安で眠れない日が続き、矢も楯もいられず書店へ走った。獣医学に関する書籍から立ち読みで情報を得ると、少し心が落ち着いてきた。偶然にも、ふと隣のコーナーの棚にあった本のタイトルを見た時、思わず手に取ってしまったのが、藤腹明子著の「仏教と看護 ウパスターナ=傍らに立つ」であった。加えて興味をそそったのは、本の帯に抜粋された柳田国男氏の文「私たち日本人の意識にしみついている仏教思想を掘り起こし、その豊かな教えを『病者の傍らに立つ者』としての看護者のあり方に活かそうという提唱は、著者の学びと実践の課程から生み出されたものだけに、説得力がある」であった。私としては特に宗教に関心があったわけではないので、「ウパスターナ=傍らに立つ」という言葉に強く惹かれたからかもしれない。この本との出会いは偶然ではなく、まさしく本文にある如く、仏教思想の一つ「縁起」（つまり現象世界はすべての原因・結果の連鎖である）であるからかもしれない。また普段、書店で隣の棚をみるという何気なくしている所作の一つ一つも意識にしみついた仏教の教えからきているものであるなら、この本は仏教思想を主要概念に展開した、含蓄のある奥深い本で

あるかもしれない。

本書の冒頭に「看護は科学的であらねばならないと言われて久しい」とある。今は、次々と翻訳された看護論があふれ、科学的に言い過ぎて知識が膨大になり、ややもすると人間の命がどんどん細分化され「看護問題」としか見ることができなくなったり、標準的対応になったりしてしまい、あまりにも理論一辺倒に突っ走ったように思う。患者中心の看護と言いながら患者さんの傍らに立った看護者であったらどうか。違和感を抱きながらも理論一辺倒から抜け切れなかったという思いが残る。「看護の対象が人であり、人が人に関わる学問だから」——。筆者は、そんな看護の現場に仏教の教えを通して警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

仏教と言えば、どうしても「死」からとらえてしまいがちだが、人間理解に立つ限り、人間としての一生の始まりが受胎直後からとらえられていることは興味深い。また、人間の「生老病死」と仏教看護の関わり方で、人間に必ず訪れる厳然たる事実としての「老い」は避けられない事実であること、「老い」は死に向かう自然な変化であり、老化によって身体は少しずつ死となじみやすくなっていくこと——等、理解はできても自分自身に重ねて考えるのはなかなか難しい。いずれにしても、看護は看護者自らが人生の根本問題である「生老病死」にきちんと向き合うことで成り立ち、「看護される者、する者がその関係のなかでともに成熟すること」を目的としている点に共感を覚えた。看護を支援する道具としてのコンピュータが如何に活躍する時代であっても、看護の姿勢は「傍らに立つ」ことであり、そのことを看護者のあり方に活かしたい。この本に触れて、強くこう思った。

(みしまゆきこ)



愛犬、元ちゃん(3才)



## ～滋賀県立大学図書情報センター～



JR南彦根駅にて下車し、バスに乗り換えて約15分で、滋賀県立大学のキャンパスに着きます。平成7年度に開学したこの大学には、塀がまったく存在せず、芝生や環濠をもつ敷地に意匠を凝らした建物が配置されています。

まず目の前にある塔に向かって歩き、その真下を通り抜けて環状の建物の中庭に入ると、すぐ左に「図書情報センター」のうち、「図書館」部門の入り口があります。これは3階建ての2階部分に当たります。カウンターの近くにはOPACなどの検索コーナーや新聞閲覧コーナーのほか、カセットテープ・ビデオテープ・LDといったソフトを豊富に揃え、15台のブースを持つ視聴覚コーナーがあります。2階には、今年発行された雑誌も並んでいます。

3階には、和書、洋書がそれぞれ日本十進分類法に基づいて配架されており、スウェーデン製のテーブルと椅子の並ぶグループ学習席もあります。そして1階には貴重書庫や電動集密書架、研究個室があります。特殊コレクションの中でも利用頻度の高い「朝日文庫」は、ここにありま。これは、開学時に朝日新聞社大阪支局から寄贈された古い文芸書など、他所にもあまりない資料です。

さて、「図書情報センター」には、「情報センター」部門もあります。演習室(3室端末総数168台)は、情報処理教育が必須ということもあり、授業時以外も学生の利用で賑わっています。こちらの部門には、CAI教室、LL教室、AV編集スタジオもあり、CADや語学の授業に利用されています。

開館からまだ多くの年数を経っていない滋賀県立大学の図書館は、新しい設備や資料と同時に前身の短期大学から引き継いだ資料も所蔵していて、現在の蔵書数は約25万冊です。これらは学外者も利用することができ、カウンターで手続きを経て利用証を作成すれば貸出サービスも受けられます。みなさんもぜひ利用してみたいはかがでしょうか。

開館日時情報などは、ホームページ<http://www.linc.usp.ac.jp/index.htm>をご覧ください。



図書情報センター外観



受付カウンター

## お知らせ

### EBMR (スタンドアローン) の利用について

図書館では、EBM( Evidence Based Medicine = 科学的根拠に基づく医療)関連の文献情報データベースの一つであるEBMR( Evidence - Based Medicine Reviews )を、1月からスタンドアローンで提供を開始しました。EBMRは、コクラン共同計画\*( The Cochrane Collaboration )の共同レビューグループによるThe Cochrane Database of Systematic Reviews ( CDSR )と臨床医学の重要文献Best Evidenceから構成されています。

(収録範囲：1991年～現在、更新：年4回)

- 1 . The Cochrane Database of Systematic Reviews ( CDSR ) は、コクラン共同計画の中心的なデータベースで臨床上のトピックごとにシステマティック・レビューがなされ、Review ( システマティック・レビュー ) とProtocol ( 進行中のレビュー ) から構成されています。
- 2 . Best Evidence<sup>1</sup>は、American College of Physiciansの刊行するACP Journal Club及びEvidence Based Medicineを収録しており、一定の基準を満たした論文を採択し、構造化抄録( Structured abstract )の形式で1ページに項目別にまとめられている優れた臨床研究の論文要約集です。

\* コクラン共同計画は、1992年イギリスで発足した治療・予防に関する医療の評価調査プロジェクトで、無作為化比較試験( Randomized Controlled Trial = RCT )を中心に、世界中のClinical Trialのシステマティック・レビュー( Systematic review = 収集し、質評価を行い、統計学的に統合する )を行い、その結果を、医療関係者に対しその時点での最善水準の治療・予防の情報を提供することを主な内容としている。

### 外国雑誌：平成13年度新規購入雑誌について

2001年より下記16タイトルが新規購入されます。

|   |   |
|---|---|
| American Journal of Kidney Diseases       | Journal of Nursing Scholarship                        |
| European Journal of Neuroscience          | Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics |
| Health Psychology                         | Journal of Psychiatric Research                       |
| Immunology Today                          | Molecular Cell  |
| Immunity                                  | Nature Cell Biology                                   |
| International Journal of Eating Disorders | Nature Immunology                                     |
| Journal of Bacteriology                   | Oncogene  |
| Journal of Neurosurgery                   | Virology  |

また、4月から国立情報学研究所よりOxford University Press刊行電子ジャーナルが試験提供される予定です。

## 本年度の学生用図書はチュートリアル教育の参考文献を中心に収集

例年、一定の予算で購入している学生用図書については、附属図書館委員会(平成12.7.25開催)においてその選定方法の見直しが行われ、その結果、今後は従前より実施してきた各講座等割り当ての推薦依頼方式をやめ、年度ごとに特定分野の重点的整備を図っていくという方針に改められました。

平成12年度については、チュートリアル教育(少人数能動学習)に必要なとされる参考文献にウェイトを置いて収集すること、また看護学関係図書にもこれまで以上の配分シェアを拡大すること、さらに医学英語の参考文献の収集にも配慮すること等の方向で、学生用図書を選定し、購入することとなりました。

チュートリアル教育の参考文献として購入した図書は、洋書57冊および和書65冊で、例えば次のようなものがあります。

- |   |       |                   |
|---|-------|-------------------|
| Clinical Gynecologic Endocrinology and Infertility. 6th ed. | (著者)  | L. Speroff et al. |
| Cardiovascular medicine. Ver.2. (CD-ROM)                    | ( " ) | E. L. Topol       |
| Atlas of regional and free flaps for head and neck          | ( " ) | M. L. Urken       |
| Histological typing of kidney tumours 2 Aufl.               | ( " ) | F. K. Mostofi     |
| Surgery of the chest. 6th ed. (2 vols.)                     | ( " ) | D. C. Sabiston    |
| 整形外科クルズス 改訂第3版  | (著者)  | 長野昭 (出版者) 南江堂     |
| 血液病学第2版   | ( " ) | 三輪史朗 ( " ) 文光堂    |
| 臨床精神医学テキスト: DSM-4診断基準の臨床への展開                                | (著者)  | Harold. I. Kaplan |
| 神経疾患のCT 改訂第2版   | (著者)  | 高橋睦正 (出版者) 南江堂    |

## 看護関係図書の充実にむけてスタート!!

本学の看護学科は、学部学生240名および大学院学生32名の定員を擁し、また附属病院には300余名の看護職員が在職し、全体比率は約1/3を占めています。しかしながら、附属図書館における看護関係図書の所蔵冊数は、医学専門図書に比して圧倒的に少ないのが現状であり、例年の限られた予算の中で看護関係図書の充実を図ることは困難でありました。そのような状況の中で、何とかできる限りの努力をして看護関係図書の充実にとりくむことが附属図書館委員会でも審議され、平成12年度においては例年を大きく上回る経費(と言っても大した金額ではないが)を充当して収集することが決定されました。さらに看護学科においても、委任経理金を活用して看護教育に必要な文献を収集し、附属図書館に配備するという方策が立てられ、現在すでに約350冊の新規購入図書が書架に並んでいます。これらの図書には、たとえば次のようなものがあります。

- 日本の階層システム1～6(近代化と社会階層、ジェンダー・市場・家族、社会階層のポストモダン他)
- 先進諸国の社会保障1～7(イギリス、カナダ、ドイツ、スウェーデン、フランス、アメリカ他)
- シリーズ看護の基礎科学1～7(からだのしくみ、からだの異常、薬とのかかわり他)
- ナーシングレクチャー(心疾患をもつ人への看護、皮膚を介した看護の技術、脳に疾患・・・など8分冊)
- 「シリーズ」生活をささえる看護(生活調整を必要とする人の看護、がん患者の看護など7分冊)
- エクセルナース実践的看護のための病棟・外来マニュアル1～5
- 新児童心理学講座1～17(学校関係と子ども、子どもの問題行動と心理療法他)

患者中心の医療が重要なテーマとなっている昨今、医学・医療のさらなる発展を期して学術情報提供の面からサポートする役割を担う附属図書館としては、今後も引き続いて看護関係図書の充実にとりくんでいきたいと考えています。

## The Library of Medical History(マイクロフィッシュ版)が入ります

The Library of Medical History(医学史関連西洋古典文献集成)は、西洋医学史を研究する上で重要な論文395点と、定期刊行物18点を集め復刻した資料集です。

中軸的な底本は、医学関係の書誌として評価の高いGarrison and Morton's Medical Bibliographyで、中には、Bernard Siegfried Albinusの“Tabuleu Sceleti et musculorum corporis humani”(1774)のような重要論文も数多く含まれています。

また、このコレクションは西洋医学史だけではなく、他の諸科学や当時の社会、文化状況などを読みとることが出来るものと言われています。

みなさん、是非一度この貴重な資料をご覧下さい。(利用はサービスカウンターまで)



## 附属図書館利用講習会(報告)

(平成12年8月~13年1月)

10月~12月にかけて、平成12年度看護学科第3学年文献検索ガイダンスを実施しました。

従来のガイダンスでは、一学年全員を同じ日に4班に分けて実施する形をとっていましたが、本年度の実習は受講生を6班に編成、3回(1回に2班ずつ)行われ、一班に10~12人という少人数で実施されました。また、従来の医学中央雑誌CD-ROM版での文献検索実習に、本年は看護学科教官の指導のもと、索引集による文献検索実習も一時間取り入れられ、より実践的な指導が展開されました。

実施日 1回目 10月24日  
2回目 11月14日  
3回目 12月25日





## 寄贈図書紹介

|  |               |      |
|--|---------------|------|
| [ビデオ] 糖尿病 関心は治療から予防へVol.4 合併症(NHKエデュケーショナル)    | 吉川隆一教授(3内)    | 責任監修 |
| リウマチ病セミナーX                                     | 七川歡次名誉教授      | 監修   |
| 呼吸器系のしくみと看護(目で見ると看護シリーズ1)(へるす出版2000)           | 大町弥生教授(看護学科)  | 訳者   |
| 療養型病床群まるわかり実践ガイド(日総研出版2000)                    | 大町弥生教授(看護学科)  | 執筆者  |
| Nitric Oxide and the Peripheral Nervous System | 戸田昇名誉教授       | 編者   |
| 手話通訳者の健康管理マニュアル(文理閣2000)                       | 埜田和史助教授(予防医学) | 監修   |
| 21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床2 機能検査(中山書店2000)                 | 北嶋和智教授(耳鼻)    | 執筆者  |
| 21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床11 言語聴覚リハビリテーション(中山書店2000)       | 北嶋和智教授(耳鼻)    | 執筆者  |
| 新図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座4 口腔・咽頭・喉頭・気管・食道(メジカルビュー2000)  | 北嶋和智教授(耳鼻)    | 執筆者  |
| 痙攣性発声障害(時空出版2000)                              | 北嶋和智教授(耳鼻)    | 協力   |

## 表紙写真について

表紙写真を所蔵している国際日本文化研究センターでは、明治30～40年代において外国人観光客向けの「おみやげ写真帳」として作製された古写真を数多く収集している。

明治時代に撮影されたそれらの古写真は、職人がモノクロ写真一枚一枚に手で色づけをし、まるでカラー写真のように完成させており、当時の人達の手先の器用さを偲ばせる。

表紙写真は、三井寺南院札所伽藍(いわゆる観音堂境内)、その展望地点から北西に琵琶湖を遠望しており、写っているのは1850年建造の観月舞台をはじめ殆どが幕末の建物である。

絵馬堂の屋根越し、眼下に白く琵琶湖に向かって伸びているのは、琵琶湖疎水の取水路である。京都の水源・水路交通・電源のための施設として計画された琵琶湖疎水は、明治18年に着工、同23年に完成した。この写真は完成前後、明治22～3年頃に撮影されたと思われる。

取水路に沿った道路や架かる橋などもみな新しく、遠く湖岸には汽船の姿が見える。そして、手前に江戸期の建物が並び立つ近世の景観、眼下には維新期を経た近代の新しい景観が興味深いコントラストをなしている。

さて、右下の写真は昨年11月に撮影したものであるが、疎水の取水路沿いには桜並木が生い茂り、見晴台からはかすかに細長い線が捉えられる程度であり、また寺の周辺には住宅がひしめくように建ち並び、湖岸には高層ビルがそびえ、昔日の静寂はいつの間にか消えていったようである。